様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６７７５

研究課題名（和文）インダス文明の社会構造の解明を目的とした基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on the Social Structure of Indus Civilization

研究代表者
小茄子川　歩（Konasukawa, Ayumu）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・客員准教授

研究者番号：２０８０８７７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：インダス文明の社会構造の解明を目的として、インドにおける現地調査と国内における研究を実施し、当文明社会の都市とその他の集落（主に農村）の実態及び両者の有機的関係性に関する基礎的な検討を行った。
　当文明社会の「統一性」を表徴する物質文化であるハラッパー文化とモノ（商品）の交換に関わる遺物（印章や分銅など）は、インダス文明関連遺跡およそ2600のうち2%にも満たない都市及び都市と強い関係性を有する集落のみから出土することが明らかとなった。この研究成果は、都市と文明期においても既存の伝統地域文化＝「多様性」を保持する農村のそれぞれを特徴づけた生産様式及び交換様式が大きく異なっていたことを示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　インダス文明の社会構造を解明するためには、物質文化のミクロレベルでの検討や、都市とその他の集落（主に農村）の実態と有機的関係性の詳細、及び物質文化にみられる「統一性」と「多様性」の相互の関係と歴史的意義について、今後の研究で掘り下げる必要がある。
　当研究の成果は、都市に表象される「統一性」と農村に表象される「多様性」の均衡構造に基づく二重社会という、当文明の社会構造に関する新理解、さらには南アジアを特徴づける通時的な社会構造モデルの考究に繋がる基礎的なデータとなる。これは最終的には、都市／文明とは何か、という人類史における普遍的な問いへの答えにも繋がるものであり、学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The main aim of this research is investigating a part of the socio-economic and political structure(s) at the basis of the formation and expansion of the Indus Civilization during the Harappan period (2600 to 1900 BCE).
“Harappan culture”, one of the important material cultures in the Indus Civilization, symbolized "unification" of this society during the Harappan period. But this research revealed that “Harappan culture”, including Indus seals and weights as the special artifacts related to the exchange of products, discovered from only ancient cities and specific sites strongly related with them. The proportion of those sites is less than 2% of about 2600 Indus sites. It seems that regional village sites maintained “traditional culture(s)”, symbolized "diversity" of this society, during even the Harappan period.
This research concludes that it is likely that Modes of Production and Modes of Exchange of the Indus ancient cities and regional small villages were greatly different.

研究分野：考古学、南アジア基層社会経済文化史

キーワード：インダス文明　社会構造　中心（都市）と周辺（その他の集落）　生産様式と交換様式　統一性と多様性　考古学　南アジア基層社会経済文化史　南アジア型発展径路

１．研究開始当初の背景

インダス文明は、紀元前 2600 年頃に現在のパキスタン及び北西インドを中心とする地域に成立した南アジア最古の文明社会である。当文明はその社会構造が解体する紀元前 1900 年頃までの約 700 年間にわたり、社会経済文化的な変容を経ながら、モヘンジョダロなどの都市とされる主要な大規模遺跡を中心として、南北 1,500km、東西 1,800km に及ぶ広大な範囲に展開した。この広大な範囲に、当文明に関わる 2,600 箇所もの遺跡が確認されており、その 9 割が小規模な集落遺跡（主に農村）である。この事実は当文明社会における小規模農村の比重の高さを示しており、インダス文明社会の特徴の一つともなっている。

言うまでもなく、この広大な地理的範囲を特徴づけた環境は多様であり、当地に住む人々に生業や居住などの側面で様々なレベル・形態での適応を要求した。その結果として、中心としての都市、周辺としての農村に、生業や技術、経済、文化レベルの異なる社会集団が共時的に存在する、多様な構造の社会が生みだされたと推察される。このような当文明社会の特徴は、「多様性」の語で表され得るはずである。

しかしインダス文明については、それが「統一性」に特徴づけられる文明社会であり、広大な版図に統一的な物質文化的様相が示される、という 1920 年代の文明の発見当初以来の根強い通説が存在し、「常識」となってきた（R.E.M. Wheeler, *The Indus Civilization,* 3rd ed. Cambridge University Press, Cambridge, 1968. など）。古代文明社会が 一つの社会システムとしてある程度の社会経済文化または物質文化的統一性を有することは当然であり、当文明についても、確かに統一的な側面を認めることができる。例えば、インダス文明を特徴づける物質文化の一つで、インダス式印章（印面にインダス文字や一角獣などが陰刻された方形・押捺型の判子状遺物）や度量衡システム、ハラッパー式土器、紅玉髄製ビーズなどに現れる、いわゆるハラッパー文化は広範に分布し、「インダス様式」とも言うべき「統一性」を体現している。しかしながら、この「常識」は十分に検証されてきたとは言えず、当文明の社会構造の実態を議論する上で、その解釈の幅を限定する大きな要因となってしまっている。

つまり本研究開始当初の学術的背景として、**当文明社会の「統一性」ばかりが取り上げられ、「多様性」の具体化を目的とした研究が不問に付されてきた**状況が挙げられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまで具体的に検討されてこなかった**当文明社会における「多様性」／農村のあり方の実態を詳らかにした上で、都市と農村の関係性を改めて問い直す**こと。つまり、**当文明の社会構造の一側面を明らかにする**ことである。具体的には以下のような研究目的がある。

①：当文明社会の中心としての都市と周辺としての農村から出土した物質文化をマクロ・ミクロレベルから考古学的に検討し、物質文化にみられる「統一性」と「多様性」を把握する。

②：都市と農村における生産様式と交換様式のあり方を、①の研究成果に基づき検討し、明らかにする。

③：①と②の研究成果に基づき、都市と農村の実態と両者の有機的関係性を、南アジア前近代史研究の成果も参照し、多角的に検討しつつ明らかにする。

本研究では上記①～③の研究目的を完遂することで、物質文化にみられる「統一性」と「多様性」の相互の関係と歴史的意義を明らかにし、当文明の社会構造の一側面を明らかにする。

３．研究の方法

「２．研究の目的」に記した本研究の目的を達成するために、以下のような研究を実施した。

①インダス文明社会の物質文化にみられる「統一性」と「多様性」に関するマクロ・ミクロレベルでの検討

中心としての都市と周辺としての農村における物質文化の実態と異同を明らかにするため、現地調査を行い、インダス文明関連遺跡から出土した遺物を比較検討した。また都市とその他の集落（農村も含む）に共通してみられることもあるハラッパー文化の実態と異同を把握するため、インダス式印章の製作技術というミクロレベルでの異同も検討した。後者の分析においては、製作実験と走査型電子顕微鏡を用いた観察を組み合わせる方法で実施した。

②都市と農村の実態と両者の有機的関係性に関する検討

①の研究を通して得られた成果に基づき、都市と農村における生産様式と交換様式のあり方を、以下の方法で総合的に検討し、都市と農村の実態と両者の関係性を詳細に掘り下げた。

生業や技術的側面と関係する生産様式については、都市とその他の集落（農村も含む）における物質文化（両者に共通してみられることもあるハラッパー文化を含む）の異同を、マクロ／ミクロレベルの異なる視点から比較検討した。またその成果に基づき、都市と農村の実態と両者の関係性を探った。

一方、経済的側面と関係する交換様式の検討に際しては、都市と農村の物質文化を比較検討する際に、モノの交換（交易／商取引）に関わる遺物（印章や分銅など）を抽出し、その分布傾向などから、都市と農村のそれぞれを特徴づけた交換様式を検討し、両者の実態と関係性を探った。この交換様式の検討については、インダス文明において貨幣（一般目的貨幣）などの交換媒体が確認されていないため、当文明社会における商品交換／貨幣の存在を考古学研究のみで明らかにすることには困難が予想された。そこで、本研究では、商品貨幣などの解釈にお

いて、考古資料と文献史料の併用により、都市と農村の実態と両者の有機的関係性を捉える試みが盛んになされている南アジア前近代史研究の成果も積極的に参照した。

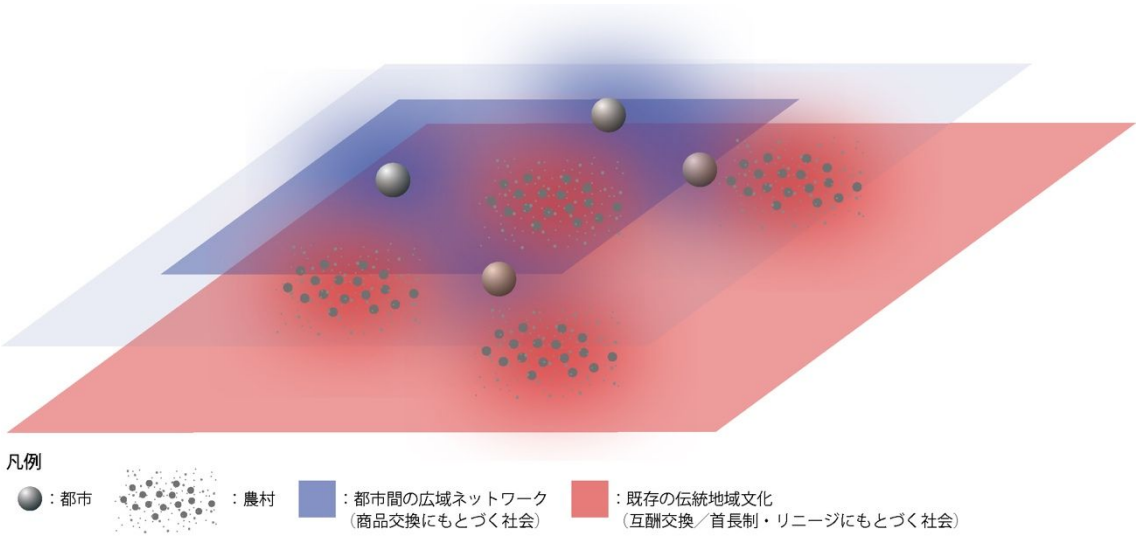
４．研究成果

「３．研究の方法」に記したように、インドにおける現地調査と国内における研究を実施し、当文明社会の都市と農村の実態及び両者の有機的関係性に関する基礎的な検討を行なった。その結果、当文明の社会構造の一側面の理解に関して、以下のような成果を得た。

当文明社会の「統一性」を表徴する物質文化であるハラッパー文化とモノ（商品）の交換に関わる遺物（印章や分銅など）は、インダス文明関連遺跡およそ 2600 のうち 2%にも満たない都市及び都市と強い関係性を有する集落のみから出土することが明らかとなった。この研究成果は、都市と文明期においても既存の伝統地域文化＝「多様性」を保持する農村のそれぞれを特徴づけた生産様式及び交換様式が大きく異なっていたことを示唆する。

インダス文明の社会構造を解明するためには、物質文化のミクロレベルでの検討や、都市と農村の実態と有機的関係性の詳細、及び物質文化にみられる「統一性」と「多様性」の相互の関係と歴史的意義について、今後の研究で掘り下げる必要がある。

しかしながら当研究の成果は、インダス文明の社会構造が、**生産様式はもとより交換様式も異にする、中心としての都市と周辺としての農村の有機的関係性に基づいた、「統一性」と「多様性」の均衡構造に特徴づけられる多中心的な二重社会という側面をもつ**、という当文明の社会構造についての新理解（下図参照）、さらには南アジアを特徴づける通時的な社会構造モデルの考究に繋がる基礎的なデータとなる。こうした理解は、国内外の既存の「常識」とは大きく異なる極めて新規性の高い知見であり、さらにこれは最終的には、都市／文明とは何か、という人類史における普遍的な問いへの答えにも繋がるものであることから、学術的・社会的インパクトも有する。



インダス文明の社会構造（現在考究中の新しいモデル）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① Ayumu KONASUKAWA, “Chronological Change and Continuity of the Seal from the Early Harappan to the Harappan periods in the Ghaggar Basin: Their Significance for Understanding the Seal Chronology and ‘invention’ of Indus seal,” *Proceedings of the 6th International Congress of Society of South Asian Archaeology*, in press.【査読有】

② Ayumu KONASUKAWA, “Seals of the Early Harappan Period in Light of the seals Discovered at Kunal,” *South Asian Archaeology and Art 2016*, European Association for South Asian Archaeology and Art、in press.【査読有】

③ 小茄子川歩、「南アジアにおける都市と農村の起源・性格―環境多様性・地政学的条件にもとづいた集住と社会のあり方―」、藤田幸一・大石高志・小茄子川歩編著『南アジアの人口・資源・環境―生態環境要因を重視した南アジアの長期発展径路解明のための中間報告―』、人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「南アジア地域研究」京都大学中心拠点・研究グループ１、13-34 頁、2019 年。

④ Ayumu KONASUKAWA and Manabu KOISO, “The Size of Indus seals and its Significance,” Frenez, D., G. Jamison, R. Law, M. Vidale and R. Meadow (eds.), *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia* (Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume), Archaeopress Publishing LTD, Oxford, pp. 292-317, 2018

年.
⑤ Manabu KOISO, Hitoshi ENDO, Ayumu KONASUKAWA, “Stone Bead Users - Symbolic Value and Trade: The Nagas,” A.K. Kanungo (ed.), *Stone Beads of South & South-East Asia: Archaeology, Ethnography and Global Connection*, Aryan Books International, New Delhi, pp. 221-230, 2017 年.

〔学会発表〕（計 9 件）
① Ayumu KONASUKAWA, “Early Indus seal production in the Ghaggar Basin: Microscopic and Experimental Analyses,” 47th Annual Conference on South Asia, Wisconsin-Madison, 2018 年 10 月 12 日.【査読有】
② 小茄子川歩、「南アジアにおける農村と都市の起源・性格」、KINDAS 研究グループ 1『KINDAS 研究グループ 1 研究報告集』第 2 回研究会、京都大学、京都、2018 年 9 月 23 日。
③ 小茄子川歩、「南アジアにおける農村と都市の起源・性格」、KINDAS 研究グループ 1『KINDAS 研究グループ 1 研究報告集』第 1 回研究会、京都大学、京都、2018 年 7 月 14 日。
④ 小茄子川歩、「古代文字研究の最前線：インダス文字研究・解読の到達点と最新の研究動向」、西アジア文明研究センター第 16 回定例研究会、筑波大学、茨城、2018 年 6 月 22 日。【招聘】
⑤ 小茄子川歩、「インダス文明：「国家」なき文明社会の統合原理」、日本南アジア学会 30 周年記念シンポジウム『インド政治の過去と現在～支配の正統性をめぐって～』、東京大学、東京、2018 年 5 月 19 日。【招聘】
⑥ Ayumu KONASUKAWA, “Chronological Change and Continuity of the Seal from the Early Harappan to the Harappan periods in the Ghaggar Basin: Their Significance for Understanding the Seal Chronology and ‘invention’ of Indus seal,” 6th International Congress of Society of South Asian Archaeology (SOSAA), Indian Museum, Kolkata, India, 2018 年 3 月 17 日.【査読有、招聘】
⑦ 小茄子川歩、「同位都市共生のメカニズム―南アジア最古の広域統合社会のあり方について―」、2017 年度 KINDAS 研究グループ 1「南アジアの長期発展径路」第 1 回研究会、京都大学、京都、2018 年 1 月 13 日。
⑧ Ayumu KONASUKAWA, “Some unique features of Indus seals discovered in the Ghaggar Basin in light of their writing, iconography, style and technology,” 46th Annual Conference on South Asia, Wisconsin-Madison, 2017 年 10 月 27 日.【査読有】
⑨ 小茄子川歩、「国家」を必要としない社会―インダス文明・「貨幣」・都市」、2017 年度第 1 回 KINDAS セミナー、京都大学、京都、2017 年 6 月 16 日。

〔図書〕（計 1 件）
① 藤田幸一、大石高志、小茄子川歩編著、『南アジアの人口・資源・環境―生態環境要因を重視した南アジアの長期発展径路解明のための中間報告―』、人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「南アジア地域研究」京都大学中心拠点・研究グループ 1 、iv＋109 頁、2019 年。

〔その他〕（計 27 件）
（1）事典等の執筆
① 小茄子川歩、「回顧と展望：南アジア（古代・中世）」、『史学雑誌』第 126 編第 5 号、史学会、268-272 頁、2017 年。
② 小茄子川歩、「モヘンジョダロ」、インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』、丸善出版、2017 年。
（2）本研究成果の社会・国民への発信
① 小茄子川歩、朝日カルチャーセンター（朝日 JTB・交流文化塾）新宿教室／横浜教室／北九州教室における講演（連続講座「インドの歴史」を含む）、計 22 件、2017 年度・2018 年度。
② 小茄子川歩、「インダス文明と考古学―都市・国家・文明―」、『岡山県立倉敷青陵高等学校 先端学問特別講座』、岡山県立倉敷青陵高等学校、岡山、2018 年 11 月 17 日。
③ 小茄子川歩、「インダス文明と考古学―「文明」とは何か」、『岡山県立倉敷青陵高等学校 先端学問特別講座』、岡山県立倉敷青陵高等学校、岡山、2017 年 11 月 25 日。
（3）賞罰
① 2017 年度（第 6 回）日本南アジア学会賞（受賞作品：小茄子川歩、『インダス文明の社会構造と都市の原理』、同成社、2016）

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。